

国語和合訳の決定訳成立について：  
1912年版『馬太福音』の改訂箇所からの考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 崇弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/2406">http://hdl.handle.net/10098/2406</a>

# 国語和合訳の決定訳成立について

## —1912年版『馬太福音』の改訂箇所からの考察—

永井崇弘

### はじめに

現在に至っても中国語圏において広く用いられている国語和合訳本（Chinese Union Version）は、1890年にプロテスタント在華宣教師大会で、文理訳、浅文理訳とともにその漢訳が決定された。その翌年の1891年11月に初めて全体の訳者が集まり、まず新約聖書から国語への漢訳が着手された。1898年に『使徒の働き』の漢訳をはじめに、1899年に『マルコの福音書』と『ヨハネの福音書』が完成、また1901年には『マタイの福音書』と『ルカの福音書』がそれぞれ完成し、四福音書の国語訳が揃うこととなった。そして1904年には新約各巻すべての国語訳が完成したが、それぞれ訳出された訳文は1905年5月から10月と1906年の5月から10月の間に詳細な検討が行われた。そして多くの修正が加えられ、最終的には1906年10月12日に国語和合訳の新約聖書が完成した。この新約聖書の訳本は1907年に出版されるが、その後も1919年に旧約部分を合わせた旧新約聖書として出版されるまでに訳文の修正が加えられ続けた。

これらの国語和合訳への漢訳方法は、それぞれの委員に翻訳部分を割り当て、訳出された訳文を他の訳者に回覧して修正、その後修正訳をもとの訳者に戻し、最終的には全体委員会で決定するというものであった。C. Goodrich は委員会の翻訳の原則と方針を次のようにまとめている<sup>1)</sup>。

- (一) 譯文須爲白話，而爲一切識字之人所能了解者。
- (二) 譯文須爲普通的語言，不可用本地的土語。
- (三) 文體雖須易解，但也必須清麗可誦。
- (四) 譯文須與原文切合。
- (五) 喻解之處，應竭盡所能，直接譯出，不可僅譯大意。

ここから、国語和合訳の重点が平易さ、暗誦のしやすさ、原文との一致性にあることが分かる。本稿では、1912年に単巻として出版された『馬太福音』と1919年に出版された『旧新約全書』にある「馬太福音」の異同箇所、すなわち改訂箇所を考察することにより、洗練された決定訳の成立過程を明らかにする。

### 1. 国語和合訳『馬太福音』について

最初の国語和合訳『馬太福音』は1901年に完成し出版されたが、Spillett, Hurbert 1975によると、それは試用版であるとされている。また1906年には改訂版の四福音書が出版され、1907年にその改訂版を合訂した新約聖書が出版されたとしている。その後、国語和合訳の馬太福音は、1908年にも上海で単巻2種と新約聖書1種が出版され、横浜で印刷された新約聖書もある。さらに1910年に1種、1911年に3種の横浜で印刷された新約聖書や同じ1911年に上海で単巻が2種出されているが、これらは1906年に改訂され1907年に出版された訳文であると考えられる。

本稿で使用する『馬太福音』は、1912年に聖書公会 (British & Foreign Bible Society) より単巻で出版されたものである。Spillett, Hurbert 1975にある No. 446の版本であると思われるが、ここには1908年の版本と同類であるという説明が付されている。また、1912年から1919年までに新たに改訂された版本は見られない。つまり、国語和合訳の『馬太福音』の訳文は、版を新たにしたのみで訳文に改訂がないとすると、1901年に試用版として完成した訳文、1906年に改訂され1907年に出版された訳文、1919年に『旧新約全書』として改訂出版された訳文の3種類が存在していると考えられる<sup>2)</sup>。そして、本稿で用いる1912年版『馬太福音』の訳文は、その出版年から1906年に改訂され1907年に出版された1907年訳であるとともに、この訳の次の改訂が1919年の決定訳であると推定できる。

### 2. 1919年訳「馬太福音」との異同について

本稿では1919年に出版された『旧新約全書』の「馬太福音」の訳文として、No. CU063A の『聖經』2006にある「馬太福音」を使用する。この版は1961年に聯合聖經公会より出版された『旧新約全書』を定本としているが、その訳文については1919年に出版された和合訳を引き継いでいる。

1912年版と決定訳である1919年訳との異同箇所、つまり改訂された箇所は、『馬太福音』全28章すべてに見られる。各章の総節数に対する改訂節数の割合は38%~76%で、そのうち50%を超えるものが計23章ある。それは全28章の82%を占めており、この改訂が各章各節にまで及んだ全面的なものであることが分かる。これら改訂された全611節のなかで、延べ1087箇所の異同を確認した。これらの異同箇所を整理すると、「ゴッドの訳語」、「括弧の有無」、「漢字の字体」、「人名・地名」、圏点を含む「字数の減少」、文または句の「構造の変化」、圏点を含む「字数の増加」、「訳語の置換」、「圏点の置換」の9つに分類できる<sup>3)</sup>。このうち「ゴッドの訳語」は53箇所あるが、これは「神」という訳語を用いるか「上帝」という訳語を用いるかといういわゆる「ターム問題」にあたるため、訳文の改訂として考慮する必要はないと考える。

「括弧の有無」は1箇所のみで9:6に見られる。1912年版では「(他就對癱子說、)」と括弧が付されているが、1919年訳では括弧が取り除かれている。この括弧は文理和合訳の『新約全書』1924や浅文理訳の『新約全書』1903などにも見られない<sup>4)</sup>。しかし、英語欽定訳 (King James Version) や英語改訂訳 (English Revised Version)、米国標準訳 (American Standard Version)

では、「(then saith he to the sick of the palsy)」と括弧が付されており、1912年版の括弧の付加は英訳を受けたものであると思われる<sup>5)</sup>。

また、「漢字の字体」とは漢字の字体が異なっているものだが、ここでは人名および地名として使用されている漢字の異同は除外している。『馬太福音』では52箇所見られるが、48箇所は「拏」⇒「拿」の改訂で、その他では花の量詞「朶」⇒「朵」(6:29)、家財を示す「傢具」⇒「家具」(12:29)、様態補語を導く「的」⇒「得」(15:22)、翼を示す「翅膀」⇒「翅膀」(23:37)がそれぞれ1箇所ずつ見られるだけで、その種類の少なさから漢字の字体の改訂はほとんどないと言える。

さらに「人名・地名」については、51箇所25種類が確認できる。これらの人名および地名は、文理和合訳の『新約全書』1924と一致している。これは1890年の大会で国語訳と同時に漢訳の決定が行われた文理訳、浅文理訳との統一性を考えた場合、これらの人名および地名の改訂は必然的なものであると考えられる。1912年版で使用されている人名・地名の漢字表記は、1852年に出版された代表訳および1859年に出版されたブリッジマン、カルバートソン訳<sup>6)</sup>とは完全に一致しないが、『新約全書』(官話)1903とは漢字の字体を含め完全に一致している。つまり、1912年版の1907年訳と推定される訳文は、『新約全書』(官話)1903の訳文を参照している可能性がある。なお、この『新約全書』(官話)1903は、台湾聖經公会のURLで1872年に出版された北京官話訳として公開されている『新約全書』(官話)1907と一致している<sup>7)</sup>。

### 3. 決定訳成立の過程とその改訂方法について

このような「括弧の有無」および「漢字の字体」、「人名・地名」の改訂は、国語和合訳の決定訳成立の本質的な要素ではないと言える。一方、これから考察する圏点を含む「字数の減少」、文または句の「構造の変化」、圏点を含む「字数の増加」、「訳語の置換」、「圏点の置換」は、他の和合訳との共通性の保持というよりは、国語という言語体にとって本質的な要素である。そして、これらの改訂箇所を考察することで、より洗練された国語和合訳という言語体が成立していく過程を明らかにすることができる<sup>8)</sup>。

改訂を確認した1087箇所のうち、これらに該当するのは927箇所ですべての約85%を占めている。一度成立した訳文を改訂するということは、無の状態から構築するのではなく、既に成立している訳文にある字や語、圏点の置き換えや組み換えであると考えれば、「字数の減少系」、「字数の増加系」、「字数の減増複合系」、「語句系」、「圏点系」、「構造系」の6つの現象に大きく分類することができる。また、この6つの現象のうち2項目以上が複合して改訂訳が成立している場合もある。以下に例を示しながら考察を行うが、矢印を挟んで左側が1912年版訳で、右側が1919年訳である。また、( )内の英訳は英語欽定訳(King James Version)で、中国語訳は1903年官話訳である。さらに下線はそれぞれ論者によるものである。

### 3. 1 「字数の減少系」

これは字数の減少を主体とする現象で、全419箇所見られる。このなかには1項目のみ、2項目の複合、3項目の複合、4項目の複合の4種類がある。1項目のみの減少は「文字数の減少」と「圏点の減少」の2種類である。2項目の複合は「文字数の減少・圏点の減少」、「文字数の減少・語句の置換」の2種類で、それぞれの項目が連動しており切り離すことができないと考えられるものである。また3項目の複合は「文字数の減少・圏点の減少・圏点の置換」、4項目の複合は「文字数の減少・圏点の減少・語句の置換、圏点の置換」で、これらも2項目の複合と同じようにそれぞれの項目が一体化しているため切り離せないと考えられるものである。

#### A. 「文字数の減少」

主語、修飾語、目的語、動詞、副詞、助動詞、助詞、接続詞、数量詞、介詞句の削除や複音節語の漢字数の削減、名詞を修飾する「的」の削減などの現象で、全363箇所見られ「字数の減少系」の約87%を占めている。

##### [主語の削除]

- (1) 「他們還沒有成親」⇒「還沒有迎娶」(1:18)  
(before they came together)
- (2) 「我們有亞伯拉罕爲我們的祖宗」⇒「有亞伯拉罕爲我們的祖宗」(3:9)  
(We have Abraham to our father)
- (3) 「你不可試探主你的上帝」⇒「不可試探主你的神」(4:7)  
(Thou shalt not tempt the Lord thy God)

##### [修飾語の削除]

- (4) 「若是你的右手叫你跌倒」⇒「若是右手叫你跌倒」(5:30)  
(And if thy right hand offend thee)
- (5) 「天國好像人撒好種在他的田裏」⇒「天國好像人撒好種在田裏」(13:24)  
(The kingdom of heaven is likened unto a man which sowed good seed in his field)
- (6) 「就叫了自己的僕人來」⇒「就叫了僕人來」(25:14)  
(who called his own servants)

##### [目的語の削除]

- (7) 「既見了他」⇒「既見了」(8:34)  
(and when they saw him)
- (8) 「耶穌回答他們說」⇒「耶穌回答說」(16:2)  
(He answered and said unto them)

- (9) 「王要回答他們說」⇒「王要回答說」(25：40)  
(And the King shall answer and say unto them)

[動詞の削除]

- (10) 「耶穌回答說」⇒「耶穌說」(17：17)  
(Then Jesus answered and said)  
(11) 「民要起來攻打民」⇒「民要攻打民」(24：7)  
(For nation shall rise against nation)

[副詞の削除]

- (12) 「他丈夫約瑟本是個義人」⇒「他丈夫約瑟是個義人」(1：19)  
(Then Joseph her husband, being a just man)  
(13) 「耶穌就對百夫長說」⇒「耶穌對百夫長說」(8：13)  
(And Jesus said unto the centurion)  
(14) 「也不記得那五個餅」⇒「不記得那五個餅」(16：9)  
(neither remember the five loaves of the five thousand)

[助動詞の削除]

- (15) 「要懷孕生子」⇒「懷孕生子」(1：23)  
(a virgin shall be with child, and shall bring forth a son)  
(16) 「要爲那逼迫你們的禱告」⇒「爲那逼迫你們的禱告」(5：44)  
(and pray for them which despitefully use you, and persecute you)  
(17) 「要把聖殿的房屋指給他看」⇒「把殿宇指給他看」(24：1)  
(and his disciples came to him for to shew him the buildings of the temple)

[助詞の削除]

- (18) 「關上了門」⇒「關上門」(6：6)  
(and when thou hast shut thy door)  
(19) 「他要照着各人的行爲報應各人」⇒「他要照各人的行爲報應各人」(16：27)  
(and then he shall reward every man according to his works)  
(20) 「看見市上還有閒站着的人」⇒「看見市上還有閒站的人」(20：3)  
(and saw others standing idle in the marketplace)

## [接続詞の削除]

- (21) 「但耶穌回答說」⇒「耶穌說」(15:24)  
(But he answered and said)
- (22) 「所以凡他們所吩咐你們的」⇒「凡他們所吩咐你們的」(23:3)  
(All therefore whatsoever they bid you observe)
- (23) 「因爲凡動刀的」⇒「凡動刀的」(26:52)  
(for all they that take the sword shall perish with the sword)

## [数量詞の削除]

- (24) 「沒有人把一塊新布補在舊衣服上」⇒「沒有人把新布補在舊衣服上」(9:16)  
(No man putteth a piece of new cloth unto an old garment)
- (25) 「有一個人告訴他說」⇒「有人告訴他說」(12:47)  
(Then one said unto him)
- (26) 「他又設一個比喻對他們說」⇒「他又設個比喻對他們說」(13:31)  
(Another parable put he forth unto them, saying)

## [介詞句の削除]

- (27) 「耶穌對他說」⇒「耶穌說」(8:7)  
(And Jesus saith unto him)
- (28) 「被人帶到耶穌跟前來」⇒「帶到耶穌跟前來」(9:32)  
(they brought to him a dumb man possessed with a devil)
- (29) 「就把他砍下來丟掉」⇒「就砍下來丟掉」(18:8)  
(cut them off, and cast them from thee)

以上の例から「主語」、「修飾語」、「目的語」、「動詞」、「接続詞」、「数量詞」では、改訂前の訳文が英訳の影響を強く受けていることが分かる。また「介詞句」と「助動詞」も、どちらかといえばその傾向があるのではないと思われる。逆に改訂前の訳文の「助詞」と「副詞」は、英訳の影響が最も少ないようであるが、全体的には英訳が改訂訳に大きく関与していることは指摘できる。そして、1919年の決定訳では国語としてより洗練された訳文とするために、改訂時に英訳の逐語訳的なこれらの部分が削除されたと考えられる。またこれらの例から、簡素な構造、簡素な表現という改訂の傾向が見えてくる。さらに、「複音節語の漢字数の削減」と「名詞を修飾する「的」の削減」について考察を続ける。

## [複音節語の漢字数の削減]

- (30) 「從他的國裏挑揀出來」⇒「從他國裏挑出來」(13:41)

(從他的國裏挑揀出來)

- (31) 「必要看見人子降臨在他的國裏」⇒「必看見人子降臨在他的國裏」(16：28)  
 (必要看見人子降臨在他國裏)
- (32) 「那時候」⇒「那時」(25：1)  
 (那時候)

[名詞を修飾する「的」の削減]

- (33) 「不聽你們的話的人」⇒「不聽你們話的人」(10：14)  
 (不聽你們的話)
- (34) 「你的母親和你的弟兄站在外邊」⇒「你母親和你弟兄站在外邊」(12：47)  
 (你母親和你弟兄站在外邊)
- (35) 「等我把你的仇敵」⇒「等我把你仇敵」(22：44)  
 (等我使你的仇敵爲你的脚凳)

「複音節語の漢字数の削減」と「名詞を修飾する「的」の削減」の現象は、中国語という言葉自体に関わる問題であると考えられる。それぞれの例の改訂前の該当部分は、例(34)以外『新約全書』(官話)1903と一致していることから、改訂前の1907年和合訳はこの1903年官話訳の影響を受けていると思われる。なお、この1903年官話訳は、台湾聖經公会のURLによると1872年に出版された北京官話訳とされている。ここでも字数を削減することにより簡素な表現が実現されていることが分かる。

## B. 「圈点の減少」

この項目は927箇所のうち46箇所確認できる。改訂前と改訂後それぞれの訳文で使用されている圈点は、地名と人名の傍線および括弧を除いて「、」、「.」、「。」の3種類である。この項目では46箇所のうち「、」の減少が40箇所で約87%を占め最も多く、残りの6箇所が「.」の減少で、「。」の減少は見られない。

[「、」の削減]

- (1) 「你就到這裏來、叫我們受苦麼。」⇒「你就上這裏來叫我們受苦麼。」(8：29)  
 (你就來了、叫我們受苦麼。)  
 (art thou come hither to torment us before the time?)
- (2) 「就出來、往橄欖山去」⇒「就出來往橄欖山去」(26：30)  
 (就出來往橄欖山去)  
 (they went out into the mount of Olives)

## [「.」の削減]

- (3) 「生命、或作靈魂、下同」⇒「生命或作靈魂下同」(16:25)
- (4) 「你們這假冒爲善的文士和法利賽人有禍了、」⇒「你們這假冒爲善的文士和法利賽人有禍了」(23:14)

これらの例から、「圏点の減少」は英訳との関係性が見られない。圏点「、」について『聖經』2006では、「凡一句而意思不全的、就用尖點。、」と凡例で説明が付されている。例(1)および例(2)の「、」が付された改訂前の訳は、その英訳からも分かるように、その前後の部分がそれぞれ句を形成しているとは考えられない。むしろ「、」を削除することで、一つのまとまりとして句を形成することができる。また、例(3)については本文中の注釈部分で、例(4)も聖書原本の異本にこの14節を欠いているものがあるため、注釈に準じて圏点を付けずに記している部分であることから、圏点「.」の削減は言語的原因というよりも書式的な原因によるものと思われる。

## C. 「文字数の減少・圏点の減少」、「文字数の減少・訳語の置換」、「文字数の減少・圏点の減少・圏点の置換」、「文字数の減少・圏点の減少・訳語の置換、圏点の置換」

これらの項目は、2つから4つの項目が連動して生じた複合的な現象である。この項目は927箇所のうち10箇所と数は少ない。

- (1) 「放豬的就逃跑了、進城裏去、」⇒「放豬的就逃跑進城、」(8:33)  
(放豬的人跑進城去、)
- (2) 「那些童女就都起來、收拾他們的燈」⇒「那些童女就都起來收拾燈」(25:7)  
(衆童女都起來、整理他們的燈)
- (3) 「那時候、有人帶着小孩子來見耶穌」⇒「那時有人帶着小孩子來見耶穌」(19:13)  
(那時候、有人帶著孩童來見耶穌)
- (4) 「是以以色列民中的人所估定的」⇒「是以以色列人中所估定的」(27:9)  
(就是以色列人所估定被賣的人的價銀)
- (5) 「這是施洗的約翰、他從死人裏活起來、」⇒「這是施洗的約翰從死裏復活、」(14:2)  
(This is John the Baptist; he is risen from the dead)  
(這必是施洗的約翰從死裏復活)
- (6) 「要和這世代的人、一同起來、定他們的罪、」⇒「要起來定這世代的罪、」(12:42)  
(要起來定這世代的罪、)

例(1)から例(3)までは「文字数の減少・圏点の減少」で、例(5)は「文字数の減少・圏点の減少・圏点の置換」、例(6)は「文字数の減少・圏点の減少・訳語の置換、圏点の置換」という複合的な

現象であるが、いずれも単句化がなされているという点では共通している。例(1)から(3)では、圏点とともに複句の字数を削減して単句に再構成されているし、例(6)ではまず介詞句「和這世代的人」と「一同」を削除し、さらに前2句の圏点も削除し、代詞「他們」を明確にするため「這世代」に置き換えて3句を単句にまとめことで19字から9字へと字数を半分以下に減少させている。そして、単句化され短くなったために圏点の置換という現象が生じたのである。例(4)は「文字数の減少・語句の置換」で、複雑で重複した表現を簡素なものに改訂することにより、文字数も12文字から10文字に削減されている。

また、例(1)(4)(5)(6)の改訂後訳では、1903年官話訳との関係性を見いだすことができる。例(4)では「以色列民」から「以色列人」へと同文字数の語で置き換えて1903年官話訳と一致させている。一方、例(2)(3)の改訂前訳が1903年官話訳と類似していることも分かる。さらに、例(5)の英訳が改訂前訳と同様に2句で構成されていることから、例(5)の改訂前訳は英訳の影響を受けていることが推察できる。つまり例(5)から、改訂前は英語訳を主に参照し、改訂時に官話訳を参照するという作業が行われていることが考えられる。

### 3. 2 「字数の増加系」

「字数の増加系」とは改訂前の句や文の各文字の位置を変化させずに、各文字の前後に文字や圏点を付加している現象を示す。前述の「字数の減少系」と逆の現象である。「字数の減少系」の約6分の1という数の少なさは、改訂前訳が原文に対して忠実に訳しすぎて、既に国語という言葉体の表現として過剰性能的になっており、さらに文字という意味情報を付加する必要がなかったからではないかと考えられる。

#### A. 「文字数の増加」

##### [主語の増加]

- (1) 「被遷到巴比倫的時候」⇒「百姓被遷到巴比倫的時候」(1:11)  
(about the time they were carried away to Babylon)  
(那時候百姓被遷到巴比倫去了)
- (2) 「到了衆人那裏」⇒「耶穌和門徒到了衆人那裏」(17:14)  
(And when they were come to the multitude)  
(到了衆人那裏)
- (3) 「這兩個兒子」⇒「你們想這兩個兒子」(21:31)  
(Whether of them twain did the will of his father?)  
(你們想這兩個兒子)

## [動詞の増加]

- (4) 「就大怒」⇒「就大大發怒」(2:16)  
(就大怒)
- (5) 「有向你借的」⇒「有向你借貸的」(5:42)  
(有向你借貸的)
- (6) 「我要打牧羊的、羣羊就四散了」⇒「我要擊打牧人、羊就分散了」(26:31)  
(我要打牧羊的、羣羊就都散了)

## [副詞の増加]

- (7) 「在他們前頭行」⇒「忽然在他們前頭行」(2:9)  
(the star, which they saw in the east, went before them)  
(忽然在前引路)
- (8) 「那無花果樹立刻枯乾了」⇒「那無花果樹就立刻枯乾了」(21:19)  
(And presently the fig tree withered away)  
(無花果樹就立刻枯乾了)
- (9) 「他們不肯來」⇒「他們卻不肯來」(22:3)  
(and they would not come)  
(人都不肯來)

## [助詞の増加]

- (10) 「主」⇒「主阿」(18:21)  
(Lord)  
(主)
- (11) 「爲甚麼難爲這女人」⇒「爲甚麼難爲這女人呢」(26:10)  
(Why trouble ye the woman?)  
(爲甚麼難爲這婦人)
- (12) 「你們是殺害先知的人的子孫」⇒「是殺害先知者的子孫了」(23:31)  
(that ye are the children of them which killed the prophets)  
(這就是你們自己見證你們是殺害先知的人的後代了)

## [助動詞の増加]

- (13) 「我差遣我的使者在你前面」⇒「我要差遣我的使者在你前面」(11:10)  
(I send my messenger before thy face)  
(我差遣我的使者在你前頭)

- (14) 「告訴錫安的民說」⇒「要對錫安的居民說」(21：5)

(Tell ye the daughter of Sion)

(應當告訴錫安民說)

[介詞の増加]

- (15) 「眼還眼、牙還牙。」⇒「以眼還眼、以牙還牙。」(5：38)

(An eye for an eye, and a tooth for a tooth)

(眼還眼、牙還牙。)

[名詞の増加]

- (16) 「要聽所羅門的智慧」⇒「要聽所羅門的智慧話」(12：42)

(for she came from the uttermost parts of the earth to hear the wisdom of Solomon)

(要聽所羅門智慧的話)

- (17) 「尋求安息」⇒「尋求安歇之處」(12：43)

(seeking rest)

(尋找安息的地方)

[指示代詞の増加]

- (18) 「我們在野地」⇒「我們在這野地」(15：33)

(Whence should we have so much bread in the wilderness)

(我們在野地裏)

- (19) 「你們就說」⇒「你們要這樣說」(28：13)

(Say ye)

(你們就說)

[接統詞の増加]

- (20) 「這樣」⇒「若是這樣」(26：54)

(But how then shall the scriptures be fulfilled, that thus it must be?)

(若是這樣)

[方向補語の増加]

- (21) 「帶他去」⇒「帶他出去」(27：31)

(and led him away to crucify him)

(拉他去要釘在十字架上)

例(4)は〔動詞の増加〕であるが、動詞が主体というより副詞を「大大」と強調するにともなって動詞「怒」に「發」を付加してバランスを整えていると考えられる。例(6)も字数のバランスで、目的語「牧羊的」が改訂後「牧人」と2音節になったため「打」に「擊」を付加して「擊打」としたものと思われる。例(5)も同様に、意味というよりもリズムを考えての改訂であると考えられる。

改訂前訳の英訳および1903年官話訳との関係については、〔方向補語の増加〕の例(21)は、「led him away」の「led」、「him」、「away」が、ちょうど「帶他去」の「帶」、「他」、「去」にそれぞれ対応しているようで、英訳の影響を受けたものであると考えられる。また、例(13)(14)でも英訳と同様に助動詞が付加されていないが、改訂の際に助動詞が加えられている。さらに、〔接続詞の増加〕の例(20)では、改訂前訳は英訳と同じく「若是」が見られないが、改訂後は1903年官話訳と同様に「若是」が付加されている。つまり、この例では改訂前訳は英語訳を主に参照し、改訂時には官話訳を参照するという作業が行われた箇所であると考えられる。このように、改訂前訳はおおよそ英訳の影響が指摘できるが、〔主語の増加〕の例(1)(2)や例(9)の改訂前は、英訳には「they」や「would」があるにもかかわらず漢訳には反映されていない。また例(3)は改訂後では主語とともに動詞も付加されているが、英訳に該当するところはない。さらに〔指示代詞の増加〕の例(18)(19)のように、改訂前訳の英訳、1903年官話訳の両方に一致しているものもある。

改訂後訳については、〔副詞の増加〕の例(7)(8)では、いずれも改訂後の訳文から英訳との関係は見えないが、1903年官話訳との比較ではそれぞれの付加成分の一致から、1903年官話訳を参照していると考えられる。また、〔名詞の増加〕の例(16)(17)の改訂後訳も1903年官話訳を参考にしているようであるが、例(16)では重複を避けるために「的」が付加されなかったり、例(17)のように文理的な語を用いて2字にまとめたりして暗誦しやすくしている。さらに、〔主語の増加〕の例(1)と例(3)でもその一致が見られるが、例(2)(15)のように一致していない場合や例(9)のように英訳とも官話訳ともとれるものもある。

その他、決定訳に改訂される際、英訳や1903年官話訳以外に、訳者自身によって新たに付加されたと思われるものが見られる。〔助詞の増加〕の例(10)の感嘆助詞および例(11)の疑問助詞は、英訳にも1903年官話訳にも見られず、他訳の参照というよりも改訂の際に新たに付加されたと考えられる。〔助動詞の増加〕でも例(13)の助動詞の付加成分は英訳、1903年官話訳にも見られない。例(14)では、1903年官話訳にも助動詞が見られるが改訂後の「要」とは異なっている。また、〔指示代詞の増加〕の例(18)(19)の増加成分も英訳、1903年官話訳ともに見られないため、平易さと暗誦のしやすさのために訳者が独自に付加したものだと思われる。

## B. 「圈点の増加」

(1) 「不是就說不是」⇒「不是、就說不是」(5:37)

(But let your communication be, Yea, yea; Nay, nay)

- (不是就說不是、)
- (2) 「不料園戶看見他兒子」⇒「不料、園戶看見他兒子」(21:38)  
 (But when the husbandmen saw the son)  
 (農夫看見他兒子)
- (3) 「也是這樣戲弄他說」⇒「也是這樣戲弄他、說」(27:41)  
 (Likewise also the chief priests mocking him, with the scribes and elders, said)  
 (也戲弄他、說)

例(1)(2)(3)は圈点を入れることにより、それぞれ意味を強調する効果が現れている。改訂前訳では英訳の影響は明確には見えず、1903年官話訳では例(1)のみが一致し、例(2)は該当する語がない。改訂後訳でも英訳の影響は見えず、1903年官話訳とでは例(3)のみが一致している。特に例(2)で1903年官話訳に該当箇所がないことから、「圈点の増加」は他訳を参照しているというよりも、改訂の際に新たに出てきたものであると考えられる。

### C. 「圈点の増加・文字数の増加」、「圈点の増加・圈点の置換」

- (1) 「所以許多人的愛心漸漸冷淡了」⇒「許多人的愛心、纔漸漸冷淡了」(24:12)  
 (And because iniquity shall abound, the love of many shall wax cold)  
 (許多人的愛心漸漸冷淡了)
- (2) 「是就說是、」⇒「是、就說是。」(5:37)  
 (But let your communication be, Yea, yea;)  
 (是就說是、)
- (3) 「或說你起來行走、」⇒「或說、你起來行走。」(9:5)  
 (or to say, Arise, and walk?)  
 (或說你起來行走、)

例(1)の「圈点の増加・文字数の増加」と例(2)(3)の「圈点の増加・圈点の置換」の重点は「圈点の増加」にある。つまり、単句に圈点を入れて複句としたために、「文字数の増加」や「圈点の置換」が連動して生じたということである。改訂前訳は1903年官話訳と一致しているが、改訂後訳は訳者によって独自に付されたものであると思われる。

### 3. 3 「字数の減増複合系」

この系は訳文の改訂に際して、字数の減少と増加が一体となっているものである。「字数の減少・字数の増加」のほかに「字数の減少・文字数の増加・圈点の置換」という複合現象も見られる。

## A. 「文字数の減少・文字数の増加」

- (1) 「有一個童女」⇒「必有童女」(1:23)  
(a virgin shall be with child)  
(童女將要懷孕生子)
- (2) 「人子要差他的使者」⇒「人子要差遣使者」(13:41)  
(The Son of man shall send forth his angels)  
(人子將要差遣他的使者)
- (3) 「我總不能不認你」⇒「也總不能不認你」(26:35)  
(Though I should die with thee, yet will I not deny thee)  
(也不說不認識你)

## B. 「字数の減少・文字数の増加・圈点の置換」

- (4) 「也不要帶鞋、不要帶拐杖、」⇒「也不要帶鞋和拐杖、」(10:10)  
(neither shoes, nor yet staves)  
(也不要帶鞋和拐杖、)

例(1)では改訂前訳から2文字「一個」を削減して、数量詞より意味を充実させるために1文字「必」を加えている。この減少と増加の現象はそれぞれが一体となっていて行われていると考えられる。例(2)(3)も同様に、文字の削減分を増加分に充当して句全体の文字数を調整し、文字が増えすぎて分りにくい訳とならないようにしているのである。「文字数の減少・文字数の増加」は全部で30箇所あるが、字数の増減は±0字が13箇所、+1字が2箇所、-1字が11箇所、-2字が3箇所、-3字が1箇所、増減幅±0字または-1字が24箇所と全体の80%を占めていることから分かる。さらに例(4)のように、複文の重複部分「、不要帶」を圈点とともに削除して、「和」を加えて単句化することにより字数を減少させ、単句化にともない圈点を置き換えている場合もある。なお、単句となった改訂後訳は字数が11字から8字に減少している。

## 3. 4 「訳語の置換系」

## A. [訳語の置換]

- (1) 「基督當生在甚麼地方」⇒「基督當生在何處」(2:4)  
(he demanded of them where Christ should be born)  
(基督當生在何處)
- (2) 「並不是單靠餅」⇒「不是單靠食物」(4:4)  
(Man shall not live by bread alone)  
(不是單靠食物)

- (3) 「跟從了他」⇒「跟從了耶穌」(4:22)  
 (and followed him)  
 (跟從了耶穌)
- (4) 「願你的國來到」⇒「願你的國降臨」(6:10)  
 (Thy kingdom come)  
 (願你的國降臨)
- (5) 「叫死人活起來」⇒「叫死人復活」(10:8)  
 (raise the dead)  
 (叫死人復活)

#### B. 「訳語の置換・文字数の増加」

- (6) 「你們那一個有一隻羊」⇒「你們中間誰有一隻羊」(12:11)  
 (What man shall there be among you, that shall have one sheep)  
 (你們中間誰有一隻羊)

この「訳語の置換系」は全222箇所見られ「字数の減少系」に次ぐ多さである。このことから、訳語の置換が「字数の減少系」とともに改訂の重点であることが分かる。例(1)(5)では複音節語を2音節語に、例(2)(3)では単音節語を2音節語にそれぞれ置換している。これは2音節語化によりリズムが整い、暗誦しやすい効果を得るとともに、例(3)のように人称代詞を明確な訳語に置換したり、例(2)のように英語の直訳のような「餅」を聖句のより正確な意味を反映した「食物」に置換したりして平易化を実現している。また、例(6)では3音節の訳語「那一個」を単音節の「誰」に置換するだけでなく、これにより削減された2文字を「中間」で補い、文字の増減なしで「你們」を強調する効果を出している。さらに、例(4)は主の祈りと称される箇所であり、同じ2音節語であるがより格調ある訳語への置換が確認できる。

他訳との関係については、例(2)(3)の改訂前訳の英訳との対応関係から英訳の影響を指摘できるし、改訂で英語の逐語訳から脱した後の訳語が1903年官話訳と一致していることから、改訂の際に1903年官話訳を参照していることが分かる。

#### 3. 5 「圏点の置換系」

- (1) 「如同我們免了人的債。」⇒「你如同我們免了人的債。」(6:12)  
 (新標点：你如同我們免了人的債。)
- (2) 「你們能喝麼。」⇒「你們能喝麼。」(20:22)  
 (新標点：你們能喝嗎?)
- (3) 「若我靠着別西卜趕鬼。」⇒「若我靠着別西卜趕鬼。」(12:27)

(新標点：若我靠着別西卜趕鬼,)

- (4) 「在我們眼中看爲希奇<sub>。</sub>」⇒「在我們眼中看爲希奇<sub>。</sub>」(21:42)

(新標点：在我們眼中看爲希奇。)

- (5) 「把他的家業交給他們<sub>。</sub>」⇒「把他的家業交給他們<sub>。</sub>」(25:14)

(新標点：把他的家業交給他們,)

- (6) 「那僕人的主人要來<sub>。</sub>」⇒「那僕人的主人要來<sub>。</sub>」(24:50)

(新標点：那僕人的主人要來,)

改訂による圏点の置換は全102箇所、その種類は例(1)から例(6)のように、「、」「.」「。」の3種類6通りですべての置換の組み合わせが見られる。このうち「.」⇒「、」の置換が35箇所と最も多く、次いで「.」⇒「。」の置換が26箇所となっており、圏点「.」に関する置換が全体の約59%と6割近くを占めている。なお、圏点「、」「.」「。」について、『聖經』2006で次のように説明されている。

凡一句而意思不全的，就用尖點。 、

凡一氣而意思不全的，就用圓點。 .

凡一氣或數氣而意思已全的，就用小圈。 。

このうち圏点「。」は意味が整っているということから、「、」は1句という基準から圏点に対する共通的認識を得やすいが、「.」は訳者によってばらつきの幅があるため、改訂前と改訂後に多数の異同が生じたものと考えられる。「.」⇒「、」の置換は例(3)のように、新標点和合訳の『聖經』2001では21箇所が「、」とし、「.」⇒「、」⇒「、」という変遷が見られる。また、「.」⇒「。」の置換は例(4)のように、新標点和合訳12箇所が「。」としており、「.」⇒「。」⇒「。」という傾向があることが分かる。なお、1903年官話訳では「.」が使用されていないため、その関係性を見いだすことはできない。

### 3. 6 「構造系」

#### A. 「構造の変化」

- (1) 「你們要悔改、因爲天國近了」⇒「天國近了、你們應當悔改」(4:17)

(Repent: for the kingdom of heaven is at hand)

(天國近了、你們應當悔改)

- (2) 「他的僕人就在那個時候好了」⇒「那時、他的僕人就好了」(8:13)

(And his servant was healed in the selfsame hour)

(他僕人立時就好了)

- (3) 「祭司長把那銀錢拾起來說」⇒「祭司長拾起銀錢來說」(27：6)

(And the chief priests took the silver pieces, and said)

(衆祭司長拾起銀子來、說)

#### B. 「構造の変化・文字数の減少」

- (4) 「就遵着主的使者所吩咐的」⇒「就遵着主使者的吩咐」(1：24)

(Then Joseph being raised from sleep did as the angel of the Lord had bidden him)

(就遵著主的使者所分付的)

- (5) 「在埃及於夢中向約瑟顯現」⇒「在埃及向約瑟夢中顯現」(2：19)

(an angel of the Lord appeareth in a dream to Joseph in Egypt)

(約瑟在伊及夢見主的使者來對他說)

#### C. 「構造の変化・文字数の増加」

- (6) 「叫他們都希奇、說」⇒「甚至他們都希奇說」(13：54)

(insomuch that they were astonished, and said)

(他們都詫異說)

#### D. 「構造の変化・圈点の置換」

- (7) 「人子必要照經上所指着他寫的去世。」⇒「人子必要去世、正如經上指着他所寫的、」(26：24)

(The Son of man goeth as it is written of him:)

(人子必要照著經上所指著他說的話去世、)

例(1)(2)は語順を入れ換えて構造を変え、前に置いた句を強調している。例(3)では処置式句を取りやめる構造の変更を行っている。このように、より単純な構造とすることで、例(1)では特定部分を強調しつつ1字減らし、例(2)(3)では2字減らしている。例(4)(5)は「構造の変化・文字数の減少」という2項目の複合である。例(4)では改訂前訳の「所吩咐的」の構造を変化させ、それと連動して「主的使者」の「的」を削除している。また例(5)の改訂前訳では場所を示す介詞句が連続しているが、「於夢中」の「於」を削除し、それと連動して「夢中」を「顯現」の前に移動する構造の変化が生じている。より単純な構造とすることで、字数は例(4)で2字、例(5)で1字減っている。例(6)も2項目の複合であるが、これは構造を単純化するとともに、それによって減った字数分を増加している例である。例(6)では複雑感のある使役の構造を取りやめ、圈点をも削除することにより2字減少させている。そして、その減少分を「甚至」の2字をもって充当し「astonish」の意味を補強している。例(7)は「構造の変化」と「圈点の置換」という2項目の複合であるが、

その重点は構造の変化にある。ここでは単句が複句に分けられ、複句化とともに圏点の置換が行われている。改訂後の総字数は2字増えているが、7字と11字の単句で複句を構成しているの、改訂前の16字よりはそれぞれ減少しているとも言える。

このように構造の変化は、介詞句での表現を無くしたり、複雑な単句を複句化したりする構造の単純化をもたらしている。それによって字数が減少して平易な訳になったり、なかには減少した文字数を他の部分の意味補強に充てて、さらなる平易化を実現させたりしている場合もある。また、特定部分の意味を強調して平易化するために、句の配置を変化させたり、句として独立させて複句の冒頭に置いたりしているものも見られる。

「構造系」における他訳との関係性については、改訂前訳の例(2)(4)(7)と改訂後の例(1)(3)が1903年官話訳と同一で、例(6)の改訂後訳も構造が同じである。一方、英訳との関係性は構造から見え難く、判断できない。

#### おわりに

これまでの考察から、1907年和合訳本の訳文であると思われる1912年版『馬太福音』の訳文は、英訳を「主」とし、それ以前に広く通用していた1872年北京官話訳と推定される訳と訳者独自の訳、文理訳、浅文理訳を「副」として訳文が成立していることが分かった。英訳が主となることで、原文との一致性を重視した逐語訳的な訳文となったが、この逐語訳的な訳文は国語という言語体が本来的に持つ意味表現の情報としては過剰性能的なものであった。それに対して1919年の決定訳は、平易化、簡素化に重点が置かれ、1872年北京官話訳と推定される訳を「主」として、訳者独自の訳と英訳を「副」として改訂を行うことで、英訳の影響から脱却し国語としてより洗練された決定訳を成立させたのである。そして、その際には訳文の字数を減少させるという方法を採用していたのである。それは、改訂箇所1087箇所の約45%を「減少系」が占め、そのなかでも漢字数を減らす「文字の減少」が87%であることから明らかである。それに加えて、「訳語の置換」も多く行われており、約24%を占めている。「減少系」とあわせると改訂箇所の約70%となり、これらが改訂の主要な部分であることが分かった。「構造系」は構造を単純化することを目的としているが、それと連動して文字の減少も生じていた。

また、漢字の追加によって意味情報を付加させる場合でも、増加字数分を他の部分で減少させて字数の著しい増加を抑制していることも確認できた。そしてこのように字数増加を抑制することによって簡素で平易な訳を保っているのである。全体に字数を抑制する傾向があるなかで、純粹に字数を増加させる「増加系」の数は少ないが、必要な場合は訳文の正確さや格調を増すためにそれが行われていることも明らかとなった。このような国語和合訳の成立過程の具体的な考察は、文理訳、浅文理訳、方言訳といった他訳の成立過程やそれぞれの言語体間の関係性を解明する手がかりとすることができる。

## 注

- 1) 賈立言・馮雪氷1934の76頁を参照。
- 2) 賈立言・馮雪氷1934にも国語和合訳の新約聖書は1907年に出版されるが、旧約部分が未完成であったため、1919年に『旧新約聖書』が出版されるまでに多くの改訂が施されたことが記されている。
- 3) 1087箇所の異同うち、3箇所（17：21、18：11、21：28）は訳文が対応していないため比較不能とし、本稿の考察対象から除外している。
- 4) 文理和合訳本『新約全書』1924は、そのコピーが台湾聖經公会の URL で公開されている。なお、同会の URL では1906年の訳文であるとされている。『新約全書』（浅文理）1903については、永井2005でその訳文が和合訳であることを指摘している。また賈立言・馮雪氷1934によると、1907年に上海で行われた宣教百年大会でマティアスが国語和合訳の新約聖書の訳文について、浅文理訳からその多くの部分を採用し、時には文理訳も参考にしたことが記されている。
- 5) この欽定訳を定本として、1881年に新約、1885年に旧約の改訂が行われ改訂訳（English Revised Version）が成立し、1901年には米国標準訳（American Standard Version）が成立している。英語改訂訳が国語和合訳の定本として指摘されているが、これについては今後の課題としたい。なお本稿では英訳に関わる考察対象として、いずれの英訳でも考察に影響を与えない箇所を使用している。
- 6) ブリッジマン、カルバートソン訳について、村岡1940では1859年に訳完し1861年に上海で出版されたとされている。
- 7) 『新約全書』（官話）1903と『新約全書』（官話）1907は、42頁11行目～13行目および43頁1行目～5行目にかけて1文字ずれているのみで、注をはじめとする他の版式は完全に一致している。
- 8) 国語和合訳の決定訳である1919年訳は、1919年の出版以来中国語圏において現在に至るまで広く通用している。この間、圏点や通用漢字、人名および地名表記、人称代詞の三人称区別、旧約新約間の訳語の統一などの改訂が加えられたが、国語という言語体に関わる大きな改訂がなされていないことから1919年訳が洗練された訳文であることがわかる。

## 主要参考文献

- 1885 *The New Testament* (English Revised Version), The University Press, Oxford
- 1901 *The New Testament* (American Standard Version), Thomas Nelson & Sons, New York
- 1903 『新約全書』（浅文理）。広東：粵城美華浸信会書局
- 1903 『新約全書』（官話）。上海：大美国聖經会
- 1907 『新約全書』（官話）：聖書公会
- 1912 『馬太福音』（官話和合）。上海：聖書公会
- 1921 『新約全書』（文理代表訳）。上海：上海大美国聖經会
- 1924 『新約全書』（文理和合訳本）。上海：大英聖書公会
- 賈立言・馮雪氷 1934. 『漢文聖經訳本小史』。上海：広学会
- 村岡典嗣 1940. 『増訂日本思想史研究』。東京：岩波書店
- Spillett, Hubert. W 1975 *A Catalogue of Scriptures in the language of China and Republic of China*, British & Foreign Bible Society, London
- 1988 *The Holy Bible* (King James Version), Riverside Book & Bible House, Iowa
- 1994 『聖經』（新標点和合本）。香港：聯合聖經公会
- 永井崇弘 2005. 「浅文理にみる平易化の特徴について－マタイによる福音書からの考察－」, 『中国文学会紀要』

第26号, 93頁-106頁。大阪：関西大学中国文学会  
2006『聖經』(和合本)。香港：香港聖經公会